

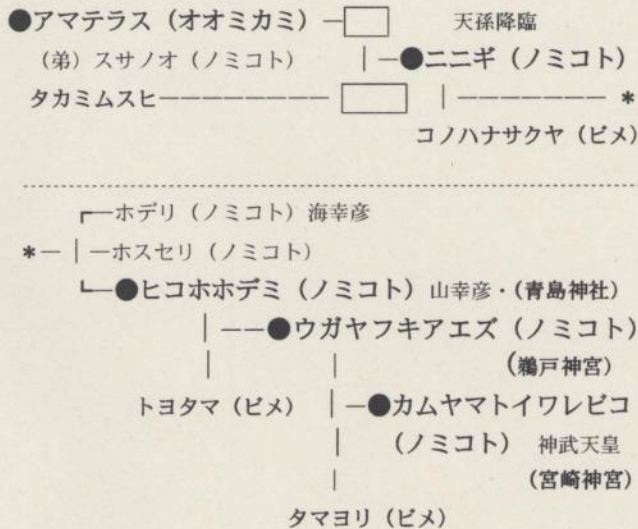
一神話伝承の里の成立一

宮崎県立図書館 徳永孝一

○皇室起源説話---7世紀後半にはじめられた国史編纂事業は、奈良時代に『古事記』・『日本書紀』として完成しました。そこには日本発祥の物語が皇室起源説話(注1系譜参照)として記され、今日に伝承されています。そのなかで二ニギの筑紫日向(つくしのひむか)への天孫降臨以来、日向の国が4代にわたる宮居の地として記されたのはなぜでしょうか。

注1「皇室起源説話」の系譜(柳宏吉著作集より)

天上の統治神



○神話諸説伝来一本誌前号では「日向風土記が記紀に影響を与えた」とする鎌倉時代学者の説を紹介しました。今回は古代・中世から近代までの史書等から記紀神話伝承の変遷を概観します。

まず奈良・平安時代には貴族諸家で記紀の筆写がなされたため、内容に微妙な違いを生じ、それが今日まで10余の説話として伝えられています。また平安半ばには新しい「風土記」の編集作業もなされています。さらに平安後半(11世紀)に「聖」(ひじり、廻国する修行僧)によって、神話伝承が多様化し、この傾向は山岳信仰の浸透した鎌倉時代では一段と変容したと思われます。

○山岳信仰・神楽と修験者---山岳は古い時代から、素朴な形で人々に崇拝されてきました。8世紀以降になると仏教経典の暗誦や苦行を積む山林修行者が入山します。そこで山岳は霊山と呼ばれ、修行する場となりました。11世紀以降になると末法思想の影響で、前述の納経・埋経のため廻国聖や写経聖が生まれ、12世紀には祈祷・治

病に力を発揮した熊野修験者が全国ネットワークを形成しています。そのころ神話とかかわりの深い高千穂地方(荘園)が熊野神領となりました。このことは神話を題材にした神楽舞とも密接な関連があると思われます。その後、修験者(通称は山伏という)は、室町時代から江戸時代にかけて真言宗系と天台宗系に組織化されています。

○宮崎・日南地域の神話伝承

1) 青島の神話---二ニギは、笠沙御崎(かささみさき)で麗美人(うるわしきおとめ)に会われて妻とされました。これがコノハナサクヤでホテリ・ホスセリ・ヒコホホデミ(青島神社の主祭神)が生まれました。ヒコホホデミはホテリの釣針を探しに綿津見(わたつみ)神之宮に行き、その娘豊玉と結ばれました。ヒコホホデミは、海神(わたのかみ)に授けられた呪術を以て隼人の祖ホテリを屈服させました(『古事記』)。(※30年前、梅原猛氏が青島に来られ同行した際、「社殿横の元宮は縄文人の埋葬地で神聖な特別な場所である」と話されていました)

2) 鵜戸の神話---ヒコホホデミと豊玉ビメの間にウガヤフキアエズが鵜戸で生まれました。(古事記)。史書の「伊東義祐飢肥紀行」には、その場所を「祖母カ懐(ふところ)」と記しています。豊玉ビメは神武の祖母にあたります。鵜戸神宮の主祭神はウガヤフキアエズです。前出の梅原氏は「海上から見るのが本来の姿」だと話されました。岩屋・亀石などの巨石群と関連がありそうです。

3) 神武天皇伝説---ウガヤフキアエズの子がカムヤマトイワレビコで東行し神武天皇となりました。宮崎神宮の主祭神イワレビコの母は玉依(たまより=ウガヤの叔母)です(『古事記』)。同神宮は江戸時代までは神武社と呼ばれていましたが、明治初期、お雇い外国人の進言もあり、初代天皇にふさわしい神域・神殿が造営されました。以上述べたように、記紀に記された天孫二ニギの降臨以来、4代にわたる宮居の地の神話が伝承され、日向国宮崎県の誇りとなっています。



神秘的な洞窟に建つ鵜戸神宮(江戸期、芭蕉と同年・同郷の俳人大淀三千風のあこがれの地であった)